

財団だより

多摩川

2000.12 第88号



多摩川中流域のもじ
鈴木由太郎蔵



多摩川源流写真展 (ニヶ領せせらぎ館)

多摩川現風景

(44) 多摩川の源流域と下流域との交流

前々回のこの欄で「多摩川の源流を訪ねる会」が、毎年11月の月上旬、紅葉の季節になると開催され、14回になるという話をとりあげた。下流から源流を訪ねる人々の話であった。今度は源流から下流へのメッセージである。源流の四季のうつりかわりを紹介した写真展が、下流の川崎市の駅前の「アートガーデンかわさき」(8月15日～20日)で行われた。しばらくして、多摩川の宿河原堰にある「ニヶ領せせらぎ館」(8月21日～9月30日)でも行われた。

山梨県塩山市に住む写真家、中村文明氏(多摩川源流観察会会長)が1994年から最近に至るまで撮影した多摩川源流の四季の写真約60点が展示された。源流ともなると、険しい断崖や滝に阻まれ一般の観光客が容易に入ることはできない秘境である。

そこには、手つかずの自然が残されている。中村氏の危険を怖れぬ挑戦により貴重な自然の姿が紹介された。中村氏は昨年12月には、源流域をくまなく調査し「多摩川源流絵図」を完成した。古老に滝や淵の由来を聞き、貴重な記録をつくりあげた。中村氏のこれらの成果を見ると、この多摩川の流域の人々はますます多摩川に愛着をふかめることだろう。

中村氏の夢はいつの日か「多摩川源流学校」をつくり、源流の自然の中で都会に疲れた人々の癒しの場とし、さらには子供達の自然体験の場としたいことである。

この源流展には、もう一つのコーナーがあった。1989年に多摩川が縁で姉妹校となった川崎市幸区のみやまこ小学校と山梨県丹波山村の丹波小学校の交流の記録が写真、絵画、手紙、ビデオで紹介されていた。

関連する財団の研究助成

< 学術研究 >

多摩川上流いわゆる奥多摩地域の環境保全のための資源調査および応用地理学的研究

1982年 徳久球雄 青山学院大学 (No.62)

多摩川源流域の森林立地に関する地形・地質学的研究

1988年 小泉武栄 東京学芸大学 (No.114)

< 一般研究 >

多摩川源流域の陸水学的研究

1984年 角田清美 都立小平南高校 (No.37)

多摩川源流部における支流・沢・尾根等の名称とその由来に関する調査研究

1999年 中村文明 多摩川源流観察会 (No.115)

多摩川散歩

使い道はいろいろ 身近な視点で
ガイドマップが完成
中原区役所区政推進課推進係

何かと便利な区のガイドマップ（地図）。今まで行政だけで作製していましたが、今回の改訂版は中原区民12人が公募によって集まり、1年余りをかけて自ら取材、調査、検討を続け完成しました（平成12年3月）。

このマップの特徴は、表紙面に大きなイラストマップを使って施設や名所・旧跡を案内したものを中心に、等々力緑地の鳥瞰図（地域を斜め上から見た立体的な地図）、区内のイベントカレンダー、多摩川や二ヶ領用水などの四季の写真、バスルート図、歴史、人口などの統計図を取り入れました。地図面には、区の詳細地図（7,000分の1）のほか武蔵小杉駅周辺の鳥瞰図を掲載するなど利用する区民の視点で親しみやすく、使いやすいように工夫しています。いずれも参加した区民のアイ

デアによるもので、タイトルも「あなたのなかはら」から「わたしのなかはら」に変更しました。地域の人に参加し、主体となって区のガイドマップを作製するのは区として初めてのことです。

区では、1万部を発行し、転入時に手渡すほか、希望者には直接区役所担当窓口で無料配布します。

なお、平成13年3月には、一部修正した改訂版も発行する予定です。

問い合わせは同区役所区政推進課

= 電話 044-744-3149（直通）=へ。

マップづくりに参加した人のコメント

中原区下小田中2丁目の金子さん

マップづくりに参加したいという有志が集まり、『ユニークで新しい発見ができる地図』を目指し、見た目にもカラフルなマップができました。区内を散歩するための道具として利用していただきたいです。



イラストマップ「わたしのなかはら」

私と多摩川



多摩川でカヌーを楽しむ筆者（2000.10新二子橋下流にて）

多摩川リバーシップの会 森田 皓一

多摩川との最初の出会いは第2次大戦中の昭和17年、小学校3年生の時だった。毎週水曜日の午後に行軍と称して、池上線の久ヶ原の小学校から鵜の木を経て多摩川に出、土手沿いに二子玉川までの、約5キロの道程を往復した。最初の2回くらいは相当へばったが、それ以降は行軍が待ち遠しく、二子玉川の清らかな砂利の河原での水遊びを楽しんだものだった。

昭和43年から9年間、調布市の多摩川住宅に住んだ。川沿いに新たに造成された住宅団地の私の家は目の前が多摩川の土手で、その藪にはひばりが巣を作り雛を育てていた。入居の当日、川を見物に行く途中で見つけたその巣は、翌日には無くなっていった。突如として多くの人が現われるようになって、河原が騒がしくなり、鳥達にとって最早安心して居られる場所ではなくなったのであろう。空高くから聞こえていたひばりの声も日毎に少なくなっていった。団地の少し上流に、あまり人の行かない、川岸が水辺に向かって大きく張り出したところがあった。そこには柳の木も自生し、あちこちから湧き出る湧水が草原の中を縦横に走っていた。この鳥達に僅かに残された楽園が無くなるのも時間の問題だった。今はそれがどの辺りだったか、私には定かでない。この団地での生活で妻は、残された多摩川の自然を出来るだけそのままに残したいという気持ちを抱くようになり、現在も環境保護活動を続けている。現在は三軒茶屋に住んでいる。数年前に手ほどきを受け、釧路川

をカヌーで下った。そして、魅せられて折畳み式の2人乗りのファルトボートを買った。近くでは多摩川をのんびりと下り、河辺の様子を楽しみながら観察、そして時には遠出してあちこちの川での川下りにもチャレンジしようと考えて。しかし20数キロの荷物を担いで川まで出掛けるのは、当年66才の私にとって決して楽な事ではなく、車で行くのも結構面倒くさいので、なかなか1人または夫婦だけで川下りに出かけようという気にはなれない。そこで、多摩川リバーシップの会のメンバーとして、年に数回の会主催の川下りに参加し、楽しんでいる。この夏には奥多摩から二子玉川までの川下りにも参加した。第1日は御嶽の杣の小橋から羽村取水堰までのラフトボートでの急流下り、第2および3日はそこから下流をカナディアンカヌーで下った。その詳細は「2000年多摩川舟遊びの記録」多摩川リバーシップの会で報告されている。御嶽から河口までの多摩川は全長70キロ強と比較的短い、その間に急流あり、浅瀬あり、(人工的に作られた)落差あり、そしてこのような所がまだあるのかと見とれる自然の景観あり、と変化に富んでいる。東京から日帰りで好みに応じての川下りを楽しめる川は他にはないであろう。

ただし、羽村取水堰で9割の水が取水されているために、水がそれ以降少なく、次第に汚くなっており、天候次第で川の状況は大きく変化する。舟からは見つけ難い落差、土丹と呼ばれる川底の岩床が水面に現われている場所、そしてブロックなど、危険な箇所も多い。また堰の数が河口までの間に8つと多く、堰越えの度に舟を苦労して運ばねばならない。多摩川は川下りをする者にとって心地良い汗をかきながら、適度のスリルと自然の景色を楽しませてくれるだけの川ではない。足場の悪い堰や浅瀬など舟を担いで歩かねばならない所も多くて、苦行を強いる川であり、事故回避のためには厳重な注意と慎重さを要求する川でもある。

それでも私はまた多摩川を下りたい。年齢を考え、奥多摩の急流下りは諦めるとしても、せめて立川付近から下流、特に川岸から歩いては近づき難い本流沿いの緑濃い風景の中、物音一つしない幅数メートルの府中用水取水口に通じる水路は、何度でも行きたい所だ。このような場所は保全場所としていつまでも今のままに残しておいてもらいたい。

よみがえ

甦れ！多摩川

二ヶ領用水を歩く — その1

徳川家康の命を受けて小泉次大夫が二ヶ領用水の開削にとりかかったのが1597年（慶長2年）、400年前のことであった。
この一級河川の二ヶ領用水は総延長は32キロの人口河川である。

今回は、多摩川の上河原堰堤の取水口から久地合流点を経由して宿河原堰堤までを歩いてみた。

8キロばかりの行程である。南武線の稲田堤の駅を下車し、北へ向って1キロばかり行くと多摩沿線道路にぶつかる、菅渡船場跡の石碑がある。この辺りは梨の栽培が盛んで、梨狩の看板が方々に立っている。多摩川の河原には女郎花が群生していて鮮やかな紅色で目を楽ませてくれる。

対岸に競輪場の京王閣の建物が見える。京王相模原線の鉄橋を背に多摩川の右岸を下流に向けて歩く。

屋形船のポート乗り場があり、Sport Haborという看板がかかっている。流れがよどみになって池のようになっている。

そこに、ポートが数隻つないである。ポートは1時間900円、カナディアンカヌーが2時間1,500円となっている。草むらのなかの小道では、健康そうに日焼けした若者がウインドウサーフィンの帆を組立てている。

前方に上河原堰が見えてくる。数日前の雨で多摩川の水は増えている。川の中州にはさぎが群れになっている。この辺りは鳥獣保護区となっている。

ここには、かつて稲田堤の桜並木があり、昭和の初めには、東京近郊の花見の名所として、王子の飛鳥山と並ぶほどであったそうだ。日清戦争を祝って植えられた250本の桜が人々の目を楽ませていた。やがて昭和43年には僅かに残っていた桜も、多摩沿線道路の拡幅工事に伴い切り払われてしまった。

上河原堰に至り、用水の取水口を見ながら二ヶ領用水に沿って歩を進める。布田橋をわたり、用水は閘門で流れを仕切られている。

暗い深い緑色の水がよどんでいる。鯉がたくさん泳

いでいる。川崎市水道局の稲田取水所の取水はこの辺である。

稲田取水所を過ぎ、新三沢川をくぐると上布田一乃橋だ、南武線をすぎるあたりは「ふるさとの川モデル事業」で多自然型川づくりの完了した地域である。木杭にソダ（小枝）をからませて堰を造った草堰、自然石を巧みに配した川筋、川端柳の風情、こころの和むふるさとの風景である。

ふるさと多摩の会の看板が田村橋のたもとに建てられている。「私達はこの川に稚鯉を放流してまいりました。川の魚を大切に育ててください。」稚鯉を放流した人々は、こんなに鯉が大きくなって、川の生態系に影響を及ぼすことになるとは予想だにしないのだろう。北星橋を過ぎ、新川橋につく。ちょっとしゃれた鳥居が橋にかかっている。橋本橋、一本塚橋、台和橋を過ぎる。この辺りでは、豊富な水を利用して紙すきが盛んに行われたと川崎歴史ガイドに解説してある。

新川橋、稻荷橋、中村橋と過ぎ、小泉次大夫の名をとった小泉橋がある。小田急線の向ヶ丘遊園の駅の南側を横切って二ヶ領用水が流れている。南橋、宿之橋を過ぎ、追分橋では五反田川（一級河川）が流入している。

直立した護岸に沿ってしばらく行き、東名高速道路をくぐると、久地合流点に至る。ここで宿河原取水口からの用水路と合流する。ここから宿河原堰へ向って歩く。用水路沿いの桜並木は地元有志の手で昭和33年に植えられたものである。400本ばかりの桜が宿河原取水口まで3キロにわたってある。

南武線の下をくぐって先へ進む。この緑陰の川岸の散歩道はすばらしいもので、是非一度歩かれることをおすすめする。

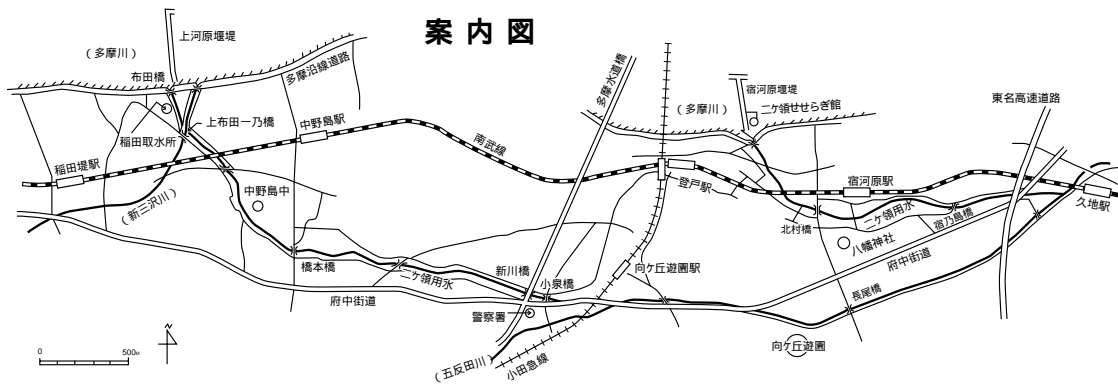
やがて多摩川の堤防が見えてくる。「二ヶ領せせらぎ館」がそこにある。

市民と行政が川をめくり交流の場を具体化したものである。新しく完成した二ヶ領宿河原堰は周辺の景観を重んじ、自然石や化粧型枠などを用い、石張り風に仕立ててある。

夕方になり風が出てきた。涼しすぎる川風に吹かれて今日の行程を終えることとした。

かわせみ
翡翠

案内図



財団からのお知らせ

研究助成報告書完成

助成集報(28巻)並びに多摩川環境調査助成集(第21巻)が完成しました。

助成集報第28巻

研究課題	代表研究者	所属
多摩川河口域における水鳥相の解析 - 特に東京湾の干潟環境との対応について -	桑原和之	千葉県立中央博物館学芸研究員
多摩川人工わんどの変遷と生息環境の評価および保全に関する研究	玉井信行	東京大学大学院工学系研究科教授
奥多摩水系(多摩川・秋川)における瀬と淵の水理及び環境特性に関する研究	池田駿介	東京工業大学工学部教授
多摩川の川床に分布する付着藻類の生態と意義に関する研究	渡辺泰徳	東京都立大学大学院理学研究科教授
多摩川および周辺水域に棲息するカワウの有害物質蓄積とその影響評価に関する環境化学的研究	田辺信介	愛媛大学農学部教授
川崎・多摩川エコミュージアム構想をモデルとした市民・行政・企業・専門家におけるパートナーシップ型地域づくりに関する調査研究	進士五十八	東京農業大学学長
多摩川最上流域における水質形成に及ぼす立地環境の影響の解明 - 環境変化に対する水源水質の予測モデル構築にむけて -	小野寺真一	広島大学総合科学部講師
多摩川流域に生息する蝶類の遺伝的多様性とその保護に関する研究	小原嘉明	東京農工大学農学部教授

多摩川環境調査助成集第21巻

研究課題	代表研究者	所属
多摩川流域及び多摩地域が抱える自然環境保全(河川、水路、丘陵等)の課題と住民活動の実態調査	榎本正邦	せたがや村ネットYUI代表
多摩川源流域における支流・沢・尾根等の名称とその由来に関する調査研究	中村文明	多摩川源流観察会会長
言語表現からみた多摩川のイメージ構造解析に関する研究	小早川智明	環境都市構想研究会会員
玉川上水の維持管理技術と美観形成に関する研究	榮森康治郎	工学院大学専門学校講師
多摩川の支流平井川における湧水と雑排水流入状況の住民による調査と水環境との関連性の検討	小山睦子	立川市立第六中学校講師

首都圏における多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究、募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 横田二郎）は、昭和50年度より多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に388件の研究に助成金を交付し、310件の研究成果が完成しています。

平成13年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究

排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究

多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査、試験研究

3. 応募方法 当財団所定の申請用紙をご請求（返信用切手240円同封）され、学術研究・一般研究いずれかを選択して、ご申請下さい。

4. 助成の決定 平成13年3月の当財団選考委員会にて選考のうえ、理事会で決定。

5. 研究の種別

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の性格	環境問題改善のための調査研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査研究で、一般の市民が、特別の学識経験を必要とせず取り組めるもの。
	（財団の過去の事例を参照）	
1件当たりの助成金総額の上限額	600万円	300万円
半年度の助成金上限額	300万円	150万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 研究に必要な機器（装置）器具、備品等。研究機関（大学等）に所属される場合は、原則対象外。 (2) 消耗品費 調査研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 (3) 旅費 調査研究のための交通費、宿泊費等。 (4) 謝金 調査研究のために臨時に雇った人の謝金等。 (5) その他 機器・備品等の借料、通信費、会議費、その他。	

6. 公募締切日 平成13年1月15日

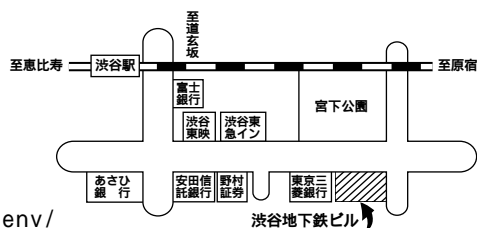
応募についての詳細は、財団事務局にお問い合わせ下さい。

- 発行日 平成12年12月1日
- 編集兼発行（財）とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
（渋谷地下鉄ビル内）

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://www.246.ne.jp/~tokyuenv/>



*印刷所 雄文社 〒336-0001 浦和市常盤9-11-1 TEL (048)831-8125